



あの頃固さが好き

宇夫方 康夫
岩手高校新六回生

高校時代の秋だったと思う。美術部に席を置いていた僕は、放課後いつものように図画教室で先輩達と一緒にキャンバスに向い、夕日に映える岩手山を描いていた。その時小笠原先生が見えて僕達が描いている絵を批評してくださった。

当時先生は岩手山の絵をたくさん描いておられ、よく個展も開かれていたので、岩手山の絵でよく知られた先生であった。普段あまり批評することもなく、いつも好きなようにのびのびと描かせてくれる先生であったが、この時は余程機嫌が良かつたのか長い時間いろいろなお話をしてくださいさつた。

話はいつか僕達の絵から離れてマチスやピカソの絵の話に移つて、その藝術性の話になつた。

どんな話になつたか詳しく述べていないが、生意氣にも僕は先生に反論して譲らなかつた。先生も本気になつて譲らず言い合いになつた。先輩達は呆気にとられてただ二人の言い合いを聞いているだけでだつた。遂に先生は声を荒げて教室を出て行つてしまわれた。今思うと、十六、七のなんと憎たらしい小生意氣な餓鬼だろうと思われたに違ひない。

それ以来、つまり二年生の後半から卒業するまで図画の点数はいつも七五点だつた。図画の時間真面目に一生懸命描いても、あるいはまったく描かずにわざとサボッて遊んでいても決つて七五点なのだ。授業をサボッいても、放課後いつも図画教室で油絵を描いていたのを見ていて、それで七五点もくれたのかも知れない。

卒業後東京へ出た僕は何年も先生にお会いすることなく、音信不通の失礼を重ねていたが、昭和五一年に盛岡へUターンした僕は先生が入院されていると聞いて数人の同級生とお見舞いに伺つた。

病床の先生に長い間のご無沙汰と、昔の生意氣を詫びようと思つていたが、顔を合わせるとすぐに先生の方から先に、聞き取りにくい弱々しい声で「成功おめでとう」と瘦せた両手で僕の手を握つてくれた。

僕は声を出せなかつた。これが先生との最後になつた。

あの手の感触は今も忘れられない。普通高校から美術に関係する仕事に進んだ数少ない教え子が嬉しかつたのかも知れない。

昭和五五年「山中先生を囲む会」を我々同級生（四六会）で開いたことがある。山中先生は昭和二七、八年当時教頭でクラス担任でもなかつたが、何かと思い出の多い先生だったので、ぜひお会いしたいという声が多く、遠く千葉の我孫子からおいで願つた。

その折り、先生への感謝の気持ちを何か形で贈ろうと幹事会で協議され、教師時代もつとも親しくされていた先生が小笠原哲治先生だと聞いて、小笠原先生の絵を贈ろうということになつた。予算も少ないので、亡き小笠原先生のお宅に伺い、先生の奥様に事情をお話したところ「山中先生に貢つて頂けるのなら本人も喜んでくれるでしょう」とこころ快く譲つてくださつた。

当日山中先生は「教師時代、特に校長になつてからは孤独だつた。そのなかで小笠原先生だけがよく話しかけてくれて親しくしていた。ほんとうにありがとう」と大変嬉ばれ、荷物になるから後でお送りしますと申し上げたが、「いや、これは持つて帰る」とおつしやつて不自由な足にもかかわらず、大事そうに手に抱えて列車に乗られたのが思い出される。

平成八年発行「石桜七十年誌」より転記